

えられていないためであると考えられる。このような要因の連鎖によって全体的な大地の呼吸不良を来しており、最終末端での地表面で水や空気が動きにくくなり、降ってくる雨水が地表面に停滞したり、浸透しきれずに表面を流れ出したりする結果、表土を侵食しながら都会と同じように泥水を発生させる原因になっていると考えられる。

上記の原因を考え、これまで私達が行ってきた各地での改善施工を踏まえて、このやんばるの開発農地の一部の敷地(42m×83m=3,500㎡)で、素堀側溝による畑地の通気改善作業を実施した。具体的には、パワーショベルによる深さ1m弱の素堀側溝をとり、この部分から滞った空気を入れ替えてやることによって、結果的に表層の雨水の浸透を回復し、停滞水を解消し、作物の根の周辺の水と空気の動き(呼吸)を改善することを目的とした。

「そのとおりだ、オレもそう思う」と理解した農人

つまり、山の大地の空気と水を循環させるという方法だ。簡単に説明するならば、本来、大地のメカニズムは、雨が降ると地面に水がしみこんで川と海で循環している。また潮の満ち引きで、いつも土壌の中の空気と水が動きながら循環している。

それがコンクリートの道路とか護岸をつくることで、海と陸との関係が遮断され、空気と水が滞った硬い土が上がってくる。雨が降っても、水は停滞したり、泥水として流れ落ちてしまう。

そこに植物は根を張って何とか生きているが、本来の水の循環ではないので、養分の吸い上げや、呼吸の不全をおこして弱ってくるという現状のメカニズムになっているということだ。

この矢野さんの話を聞いて、やんばるの森も海もその自然を生活の営みの場として深く関わっている地元国頭村の島袋太さんが、「そのとおりだ、オレもそう思う」と、ずっと感じていて、そして言葉にならなかった疑問が解決し、そして自分もその再生を手助けしなければならないという思いが一気に吹き出していった。

島袋さんは、これまでは自然と純に向かい合っただけだったが、どうしたら良くな

っていくかと、独自に自分の畑で実験的に改善をはじめた。

山の呼吸が「見えてきた」島袋さん

その島袋さんに会った。そして、彼の畑に案内してもらった。

土砂降りの雨の日だった。まず観葉植物の畑の手前右側に小さな池のような水たまりが目に入る。そして、畑のまわりに、側溝が掘られて続いているのがわかる。

—ここは矢野さんが手を入れたのですか？

「これは自分で」。

—今島袋さん独自の畑はどのくらいあるのですか？

「3ヶ所。いいと思うよ。土がやわらかいもんだから、掘り起こしなんか、楽だわ」。

—島袋さんから見て、やんばるの森はいまどういう状態ですか？

「傷んでるね。すごい傷んでる。木の密度、濃さがちがうから」。

—緑の濃さですか？

「それも含めて、木の濃さだね。やんばるの森は、薄暗いのがやんばるの森だったけど、今は見通しがつくから。みんな気づかないからね」。

何を聞いても、島袋さんから返ってくる答えは断片的で短い。だが、芯をついた言葉だ。

「わかるでしょ。上の部分じゃなくて、下の部分に問題があるわけ。こちらへん一帯がそうだね。そう、下から悪いやつが出てくる」

「自分でやってるから、わかりますよね。矢野さんのいうことだけ聞いてやってたら、理解はできないでしょうね。無理だと思う。自分がやりながらだから、ああそうだと理解できる」

「植物は、はっきり顔を見せてくれるから、いいですよ。再生してきているのも、はっきりわかるしね」

やんばるの森で植物を育て、葉を見て、山を眺めて、海に潜って……、ずっと暮らして来ているから、山と海の生態的なつながりも、森を眺めて、その下で傷んでいる大地の呼吸の状態も「見える」というか、全体として感じる事ができるのであろう。1枚の葉っぱから山全体の自然環境状態をも推し量ることができるのである。

島袋さんが、そんな感性で、やんばるの森の傷み、そしてその再生に向かわせたの

は、矢野さんとの出会いだった。その辺りの事情について、上里さんは、こう説明する。「彼は、はじめは何でやんばるの木が枯れはじめてきているのか、そして何で穴を掘っているのかということがよくわからなかったようです。でも矢野さんの話を聞いて、カチャカチャと彼は頭の中にインプットしていったんです。1日一緒に過ごただけで、彼はほとんど理解していました。いやー、太(島袋)はすごいなと思いましたね。他の人は、矢野さんの話を聞いているときは「ほおー、そうか」とわかった気ではいるんですが、作業をさせてみるとまったくちがいます。矢野さんもいっていましたが、一緒に作業をして、彼のやったところは直すところがないそうです。不思議なんですよ、わかるんですね」。

島袋さんが、いかに山の現状を「見る目」を持っているか、さらにこんな驚きもあったという。

「今年はツバキの仲間のイジュの花がすごく咲いたんです。僕はそれを見て、あ、いつもより多いなあ、山が元気になってきているのかなと思っていたんです。ところが彼は、イジュの花が見えるというのは、山が薄くなっているというのです。イジュというのは、パイオニアプラントなのですよ。だから、明るいところで咲いてきて、だんだんあとからきた木に負けていくんです。だからイジュの葉っぱがたくさん見えるのはよくないというのです。見てごらん、あそこはエシがいっぱいだろう、まわりの葉っぱは薄いだろう、地面が見えるぞー、地肌が見えるぞーというのです。聞いていて、あ、そうか、やっぱりこいつすごいなあと思いましたよ。見るところが違うのですね」

「だから僕は、割り切っているんですよ。絶対あのふたり(矢野・島袋)にはなれないと。ただ僕にできることは、メッセンジャーでしかないです。彼らのいっていることを翻訳して、いかに行政とかに持って行って何とかこの状態を食い止めようと、その仕組みを作ることしかできないです」。

行政と人と、そして新しい学問体系

矢野さんにはじまり、島袋さんが加わったやんばるの森の再生手法を、仮に「やんばる方式」と名付けよう。この工法で防風林のリユウキュウマツも緑の濃さが増した。施工後